

第4分科会 自立活動

テーマ 「一人一人の教育的ニーズに応じた豊かな生活を支援する自立活動」

提案Ⅰ 「社会で個性を生かして生きていこうとする生徒の育成」
～コミュニケーション能力を育てる取組を通して～

発表者	徳島県 鳴門市鳴門中学校	教諭	福井 英子
司会者	徳島県 鳴門市堀江北小学校	教諭	藤澤 浩子
助言者	高知県教育委員会 特別支援教育課	チーフ	板橋 潤子

I 実践に当たって

1 学校の状況

徳島県北部に位置し、鳴門市でも島の中にある全校生徒181名の唯一の中学校であり、本校は情緒障がい、知的障がい、病弱の三つの特別支援学級を設置し、計12名の生徒が在籍している。教室は学年別で、一人一人の教育的ニーズに合わせた学習カリキュラムを組んで生徒たちは学んでいる。自立活動の時間は全員で取り組める時間を考慮し、週1時間、火曜日の3時間目に設置している。

2 本校の教育目標

「知・徳・体の調和のある発達を図り、社会の変化に対応できる、広い社会性を身につけた生徒を育成する」を教育目標においている。生徒も教師も「感じ・考え・行動する」をスローガンに、何事にも挑戦する中で、個々の成長を促している。特に特別支援学級では、コミュニケーションの取り方を学び、個々の特性を生かして社会での自立や社会への参加を促すことを目標とし、指導に当たっている。

3 自閉症・情緒障がい学級に在籍するAさんとの出会い

(1) 1年生の時の様子

Aさんは、入学当初から学校には休まず歩いて登校し「おはようございます」や「～がしたいです」「～はしないのですか」と自分がしたいことを伝えることができた。しかし、分からないことや嫌なことがあると「うー」「うわぁー」「もう」と叫び、顔が赤くなり、興奮し泣き出すという状態が何度も見受けられた。泣き止むまでしばらく掛かることもあり、自分自身どうしたらいいのか困っているようであった。

また、Aさんは人と関わるのが好きで、自分から積極的にあいさつをしたり、会話をしたりできる。しかし、口唇の動きに不十分さがあり、うまく伝えたいことが伝わらないことがある。週1回、言語訓練に通っていて口唇の動きを練習している（構音指導）。会話が成立しなかったり、相手との会話がスムーズに進まなかったりするとあきらめることがよくあった。

そのときにも「なんで分かってくれんの？」と口にし、泣いてしまうことがあった。

さらに、運動が苦手な体重が増加傾向にあり、物に体がぶつかったり、物を落と

したりしてしまう。じっと静止し座っていることが困難で、体を斜めにしたり上靴を脱いだりしていることが多いため、相手の話をじっくり聞き取ることができない。

そこで、Aさんが自分の思いを言葉で伝えることができるようになれば、少しでも気持ちが楽になるのではないか。また、相手の言っていることを受け止めることができるようになれば、コミュニケーションを楽しめるのではないかと考えた。

(2) 育てたい力

保護者は、自分のことは自分でできるようになってほしいと思っている。私たちは、人とつながって、助け合って生きていける。そのつながる道具や手段となるのが言葉だと考える。自分で生きていくには、ソーシャルスキルを身に付けて、自分の気持ちを言葉で伝えることができるようになることがその願いに近付ける一歩である。学校でも、ソーシャルスキルを身に付けて自分の得意なことを生かして生活を楽しんでほしいと考えている。

保護者の願いを叶えるためにも、自立活動の6区分の中の「情緒のコントロール」「他者の意図や感情の理解と場に応じた行動」を習得することによって、心理的な安定と人間的な形成につなげたいと考えた。

II 実践内容

I 自分の思いを言葉で伝えることができる

(1) 取組について

① 英語の時間におけるコミュニケーションスキルの習得

英語の授業では毎時間、ペアで会話をする時間を設けている。そのときに指導者から「自分の気持ちや伝えたいことは言葉で伝えるようにしましょう」と呼び掛けている。また授業をスタートさせるには、「授業で分からなくなったときは『分かりません』や『教えてください』と声に出して伝えるようにしましょう」と声を掛けている。自分の思いを適切に表現する方法を学習することで、泣く、わめくなどの不適切な行動が減るのではないかと考えた。自分の思いを適切に伝えるためには、言葉が発する場面や語彙を増やすこと、相手に伝わるかどうか体験することが大事である。Aさんにとって「分かりません」や「教えてください」などの言葉が増え、使える言葉を増やすことは不適切な行動を減らし人間関係を良好にすることにつながると考え取り組んだ。

最初どのように答えたら良いのか分からず頭を抱え叫んでいたが、「分かりません」「教えてください」を言うように促す声掛けをすると、「分かりません」と言えるようになってきた。そして、語頭の「わか～」「教～」を示すことから始め、取組を続けていくと「分かりません」や「教えてください」と自分で言うようになった。今ではペアでの活動が待ち遠しくなり、「分かりません」とはっきり聞こえる声で言うようになり、パートナーと英会話を楽しんでいる。

また、前に出て、自分の意見を発表するという自己表現をする場面を設定した。最初は「どうしよう」と頭を抱えていたが、「そんな時は？」と指導者が手掛かりを与えると「～で英語でなんて言うのですか」と尋ねることができるようになっ

てきた。そして、自分の言いたいことが英語になると自信をもってみんなの前で発表できるようになっていった。

さらには、即興で出された質問にも応じることができる場面が増えた。言葉で自分の思いを伝えることができたなら、指導者は、「がんばったね」「言葉で言うとはよく分かっていいな」「言えたね」など、すぐみんなの前で褒めた。そして、言えた回数を記録にし、Aさんにも見せ、本人自身が確認できるようにした。保護者にもできるようになったことを伝えた。その記録を取ったものが次の表である。

〔言葉で伝えるチェック表〕

「分かりません」 「教えてください」が言えた・・・○						言えなかった 頭を抱え込んだ・・・×			
11/ 5	11/ 6	11/ 10	11/ 13	11/ 17	11/ 20	12/ 8	12/ 9	12/ 11	12/ 16
×	×	○	○	○	×	×	○	○	○
12/ 18	12/ 22	1/1 5	1/1 9	1/2 1	1/2 2	1/2 8	1/2 9	2/9	
○	○	×	○	○	○	○	○	○	

(2) 生徒Aさんの変容

日常生活では、以前は、「どうせ分かってくれない」という思い込みで、自分の気持ちを語らなかつたAさんだったが、今ではなぜ自分が怒っているのかや、どうしたらいいのか分からなくて困っていることを声に出して伝えるようになった。人に対して自分のことを伝え、それを相手が分かってくれているということを実感できる機会が増えた。

自立活動の時間では、自分が質問したいことが出てきた時に「今は質問する時ではありません」「説明が終わったら質問しましょう」の声掛けで待つことができ、質問できる場面が来たら、質問することができた。そして「説明の中で先生が話してくれたのでここまでは分かりました」と付け加えて自分の理解状況を話すことができた。また、刺し子の作業の途中でも、「はさみを貸してもらえませんか」と前もって意思表示ができ、積極的に作業に取り組み、集中することができるようになった。

帰宅し、保護者が忙しい時には自分でご飯を炊き、用意ができるようになったと家庭での変容について保護者からうれしい報告を受けた。「自分のことは自分でできるようになってほしい」という保護者の願いを受けて、学校で目標を立てて取り組んできたことが、少しずつできるようになってきた。Aさんは「分かりません」や「教えてください」の言葉を出すことで、自分自身の気持ちが楽になることを覚えたようである。場面によって相手を意識し落ち着いてやりとりができるようになってきた。このようにコミュニケーションスキルの段階を追って習得することで、自信をもち、情緒の安定につながっていると考える。

Ⅲ 成果と今後の課題

「分かりません」「教えてください」は人と関わる一つの言葉だと考える。Aさんはこの言葉を言うことで、自分にたくさんの方が関わってくれるようになったことを感じている。そして、何よりもAさんが「分からない」という言葉が言えたのも、それをしっかり聞き、受け止めてくれる仲間が周りにいたからだ実感できる。だからこそ、自分を表現することに積極的になれた。また、自分の失敗を語れるようになってきたのだと思う。今では、毎朝、歩いて登校し、遠くにいる人に大きな声で「おはようございます」と言えるようになるなど自信をもって学校生活を送っている。

次の段階として、人の話を聞く態度を身に付けてほしいと考えている。姿勢の保持や相手の目を見て聞くというようなコミュニケーションスキルである。このような姿勢が仲間を増やし、助け合って生きていこうとする人間関係につながると考えた。今はそのような態度を示すカードを見て、正すという段階ではあるが、今回も指導者よりも早く友達からの声掛けがあるので、すぐ自分で気づき、直すことができるようになっていく。コミュニケーション意欲を高めるには、伝えたいという発話者の意欲と、聞いて相手を知りたいという聞き手の態度がうまく響き合って成り立つと考える。今のAさんの学習環境は恵まれている。この環境の中でコミュニケーションをよりスムーズにすることができる手段を考えさせることがこれからの課題である。

〈指導・助言〉

自立活動の指導においては、実態把握から目標設定を行う際に、どのような視点で行うかということがポイントの一つであると思う。本実践では、生徒の思いを大切に、「～したい」という姿と、「～できない」という困っている姿の両方から、生徒の「人と関わることが好き」という強みを生かし、また、保護者の願いも踏まえて目標を設定している。主体的な学びを実現するために、援助を求める言葉をスキルとして使えるように場面を設定し、必然的に使うことを仕掛けていったことで、スキルを身に付けることにつながっている。指導者のプロンプトを徐々に減らしながら、一人で援助を求める言葉が使えるようになり、そのことで、相手が分かってくれるという安心感につながり、結果、更にコミュニケーションをとろうという意欲につながっていったことがうかがえる。

また、本実践から、環境として「それを受け止めてくれる仲間」という学習集団が基盤にあることの重要性を改めて感じた。特別支援学級の学習で「できる」ようになったことを交流学級などでできるように般化させるためにも、認め合える風土が大切である。互いに学び合い、育ち合う風土とともに、学校全体で連携を取りながら取組を進められているのではないかと思う。

本実践でAさんが身に付けた援助を求めるスキルは、自立に向けて必要な力であると考えられる。本実践には、卒業後に目指す姿である長期目標等は示されていなかったが、今後、その長期目標に向かうことができるよう、PDCA サイクルで実践を積み重ねてほしい。また、自立活動の学習の中で、更に、自分のできることや苦手なことなどについての自己理解を図りながら、コミュニケーション力を向上させることを期待する。